

届け 世界の果てまでも

令和3年9月10日

No. 29

文責 校長 飯久保一男

前号で「カレーライス」(作:重松清)が6年生の教科書に載らなくなったと書きましたが、今回の教科書改訂からは、5年生の教科書に掲載されていました。すでに1学期に学習したそうです。訂正してお詫びします。

言い訳

こんなコラムを見つけました。

商社マンが3か月後の長期の海外赴任の辞令を受けました。
奥さんと幼い子どもたちは、一緒に海外に連れていくことにしました。
でも、70歳のおばあちゃんだけは、
英語しか通じない慣れない土地での生活はムリだろうと、
日本に残ってもらうことにしたのです。
それを聞いたおばあちゃんは、大ショックです。
かわいい孫たちに会えなくなってしまうからです。
そこで、このおばあちゃんは、ある行動に出ます。
それは…、「英会話教室に通って、3か月で英語の日常会話をマスターしてしまった」のです。
おばあちゃん、素晴らしい行動力、そして集中力です！



マンガ「スラムダンク」安西先生

このおばあちゃん、とても「カッコイイ」と思います。年齢などの言い訳を一切せず、行動を起こしました。「何のために学ぶのか」を明確にすると、「意欲が違う」「集中力が違う」ということを証明してくれています。この英会話教室の講師たちも「70歳の奇跡」と讃えたそうです。このおばあちゃんは、二度と孫に会えなくなるかもしれないと思ったときに、あきらめませんでした。そして、自分が英語をしゃべれるようになるという、とてもレベルの高い目標に挑戦し、見事に達成したのです。

私が今から、何か新しいことを始めるとしたら、「時間がないから」「もう歳だから」と、できない“言い訳”を探すと思います。しかし、言い訳をしていても何も始まりません。自分があきらめたらそこで終了です。



自分がやらなければならない仕事に対して、私は“言い訳の名人”だと思っています。「とりあえず今はいいや」「後でやればいいのか」「今は忙しいから」「今日は疲れているし」次々と言い訳が浮かんできます。そして、やらなければならないことを後回しにするのです。そうはいつでも、人から頼まれた仕事は優先してやる質たちですし、好きな仕事(この通信をつくることはこちらです)は他の仕事を放たっておいてやっていることもあるのですが…。

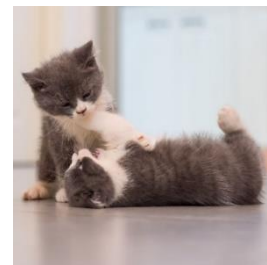
言い訳をなくす方法は、すぐに動き出すことだそうです。それも、一度に全部やろうとしないで、ほんの少しの一步を踏み出すことだそうです。始めたのに途中でやめるのはみっともないとか、一度に全てをやり切ろうなどと思って、完璧をめざすとハードルは高くなり、動き出せなくなります。長期的な目標も大切ですが、少し先のできそうな目標(今日の目標・今週の目標など)をもって、動き出すことが肝心です。そのためには、言い訳をしないことは第一条件になります。

子どもたちにトラブルがあったとき、親や教師は原因や理由を聞きます。子どもたちが言うその原因や理由を分析してみると、次の4つに分けられるでしょうか。…私の経験からの勝手な分析です。専門家の分析ではありません。

- <その1> 責任を他に求める 「アイツが先にやってきたんだもん。」
- <その2> 多数性・正当性を求める 「自分だけじゃないもん。みんなやっていたもん。」
- <その3> 自分を反省する 「イライラしてやっちゃった。」
- <その4> ウソを言ってごまかそうとする

※ケースバイケースです。<その1>であり<その4>でもあるといった、合体型なども考えられます。

<その1><その2>は、言い訳に聞こえることが多くあります。言葉の最初に「だって…」「でも…」をつけることができます。<その3>は、自分の非を認めて正直でいいとは思いますが、その子の「イライラ」でのトラブルは勘弁してほしいものです。<その4>のウソについては後述します。私の経験では、「教師」として、子どもたちと接していると、それでも冷静に聞いていられるのですが、「親」として息子の言い訳を聞いてみると、怒りが湧いてきて、さらに叱ってしまうなんてことがありました。



言い訳をする子どもには次のような心理がはたらいっているようです。※こちらは、心理学者の分析です。

■ 自分を守ろうとする

正直な気持ちを話したのに、親に怒られた経験がある子は、それを避けようとするために言い訳をするようになります。例えば「どうして片づけしないの？」と聞かれたとき、素直に「面倒だから」と答えたのに、怒られた経験がある子どもは、「弟がまだ遊びたいって言ってるから」などと「ウソ」の言い訳をするようになります。さらに、知恵がついてくると、自分の悪い割合を少なくしようとするそうです。悪いとは思いますが、それは「誰か」や「何か」のせいでもあって、自分だけが悪いのではないということにしたい心理がはたらきます。自分を守ろうとする心理は、人間の本能的な心理です。自分を守るための自己防衛として人間には備わっています。

■ 人からの評価を気にする

親や教師、友だちからどのように思われているかを気にする子どもがいます。そういう子が、人のせいにすることがあるようです。特に、日ごろから、周りの大人に「いい子」と褒められている子どもは、いい子でなければ、親や教師に認められないといったプレッシャーを無意識に感じています。そのため、叱られたり注意されたりすると、人のせいにしてしまうようです。また、兄・姉であることで、自分の立場にプライドや責任を感じている子は、自分の非を認められずに、人のせいにすることもあります。普段から、お兄（姉）ちゃんらしく行動することを期待されていたり、また自分でも、そうすべきと思いついていたりすると、その立場やプライドから言い訳をする場合もあります。

■ 自分の可能性を残しておきたい

子どもが言い訳するとき、本当はできるという可能性を残しておきたいという心理も働くようです。例えば、「時間がなかった」という言い訳は、時間があればできたという可能性を残す言葉です。「忘れていた」という言葉は、忘れるまではやる気でいたという可能性を含んでいるのです。



これらのいずれも、親や教師にがっかりされないように、自分への期待を持ち続けてほしいという子どもの心理が、言い訳として出てくるといえます。子どもは親や教師にがっかりされたくないのです。子どもを叱ったり、その理由を聞いたとき、がっかりした姿を見せないことが肝心なことのようです。